第136号

THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

関西大学通信

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3丁目

迎えることば

学長
大西昭男

このころの稽古には、ただ指をさして人に笑はるるとも、それをば顧みず、内にては、声の届かんずる調子にて、宵・暁の声をつかひ、心中には願力を起こして、一期の堺ここなりと、生涯にかけて能を捨てぬよりほかは、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能は止まるべし

―『風姿花伝』（第一・年來稽古条々）―

世阿弥がここに言う「このころ」とは、「十七、八より」ということである。いま入学の喜びにひたっておられる諸君の大方が、十七、八歳であろうか。その喜びを私どもも共に喜びたい。と同時に、その喜びがいかになり行くものかということも、老婆心までに申しておきたい。

この入学の日に、われ成就せり、とあらためて勝利の喜びを嚙みしめることは、さもありぬべきことである。この日の喜びは、もう二度とはめぐって来ない。その喜びに存分にひたって当然である。その喜びは、しかし、たちまちにしてうつろうこともまた必然である。うつろう前に、しかと性根をさだめられたい。より高く、より遠く、より大きい喜びへと想望の目を放っていただきたい。

知ることを求めての旅に既にして諸君はいかほどか踏み出して来ておられることとは思う。知ることの喜びを既にして何程か味わい知っていることとは思う。しかし、十七、八の今こそが、「一期の堺」であると思いさだめて、今の入学の喜びを、学ぶことの喜び、知ることの喜びへと転じて行ってもらいたい。

高度情報化社会の現在、「知る」ことはますます容易になって来たかのような錯覚に人はとらわれがちである。スターやタレントを追いかけまわしては、「見ちゃった！」と欣喜し、クイズ番組に、あるいは街頭番組に群がっては、「映っちゃった！」と雀躍する。そこには人間としての苦しみもなく、人間としての喜びもない。

人間は、その生涯かけて、人間になって行く。あるがままに人間であるのではない。諸君一人ひとりのうちに、人間になろうとしている可能態を見出したい。時々刻々に人間になりつつある階梯を見守らせていただきたい。

千里眼

〝最後の楽園〟、南太平洋〝といったキャッチ・フレーズが日本人ツーリストをひきつけている。千里眼子も何度かこの地域を訪れ、そのたびに〝近代化〟の掛声のもとに徐々に変わりつつある姿を目のあたりにしてきた▼それにつれて、種々の矛盾も生じている。たとえば、伝統的農業では自分たちが食べるに十分な食物を、いかに年間を通じてときれることなく、手近に、そして凶作の危機に対処しながら生産するかに一義的な価値が置かれてきた。それに対して近年盛んになりつつあるコーヒー、コプラなどの商品作物の生産においては何よりも効率と生産性が追求される。この生産に関する相対立する価値観の狭間で、非効率的な混植農法が商品生産にブレーキをかけ、逆に生産性の追求が食糧の自給を危うくする、といった矛盾が顕著である▼私たち日本人もこのような近代化に伴う諸矛盾を経験してきた。明治以来、富国強兵、所得倍増といったスローガンのもとに日本社会は大きく揺れ動いてきた。しかし、〝和〟とか〝義理〟といった伝統的価値観は根強く生き残っている▼過日、九州に進出した大手企業の調査をおこなったが、そこでも親企業と下請企業は単なる契約関係だけで結ばれるのではなく、まさに〝親子〟という経済外的なしがらみで結びついていたし、社内では親睦活動、〝家族〟的雰囲気づくりが企業活動の潤滑油として欠かせないようであった。最近ではこうした伝統的価値観に基礎を置く日本的経営・労使関係が日本経済の強みとして内外から見直される風潮がある▼しかし、われわれは日本的社会や価値観の弱点も知っている。問題は、それをいかに止揚しつつ、より住み良い社会を築いていくかであろう。

（S・H）

人事異動

四月一日付で次の先生方が昇任された。

▼法学部▲
- 教授　永田真三郎
- 同　福瀧　博之
- 助教授　栗田　隆
- 同　園田　寿
- 専任講師　孝忠　延夫

▼文学部▲
- 教授　岩田　家正
- 同　宇佐美幸彦
- 同　北岡　正子
- 同　日下　恒夫
- 同　坂本　武
- 同　瀬島　豊
- 同　田村　典子

▼経済学部▲
- 教授　春日　淳一
- 同　楠　貞義
- 同　佐藤　真人
- 同　若森　章孝
- 助教授　杉原　達

▼商学部▲
- 教授　井上　昭一
- 専任講師　羽原　敬二

▼社会学部▲
- 教授　植條　則夫
- 助教授　松原　一郎

▼工学部▲
- 教授　浅野幸一郎
- 同　金田　彌吉
- 同　黒川　秀基
- 同　中桐　明和
- 同　平根　喜久
- 同　山本　清香
- 助教授　石原　勲
- 同　小林　武
- 同　宮下　彬
- 専任講師　飯田　幸雄
- 同　小田　廣和
- 同　藤澤　隆章
- 同　冬木　正彦

新任教員紹介

▼四月から新しく次の先生方が本学に就任された。

文学部教授　肥田　晧三

昭和五年生まれ。大阪船場の旧家の出。自ら上方町人学者の流れに立ちながら、専門の近世文芸研究では特に、大阪の文人発掘に秀抜の業績を挙げられ、上方の芸能諸般に精通、大阪落語や俄についての論考ならびに、『露伴還珠』、『三村竹清集』、『林若樹集』などの著書無数。また、古書界にその名を知らぬ人なしと言う。昭和四十九年より本学図書館嘱託、五十四年より文学部非常勤講師。今後も、風呂敷包みをかかえ、楚々と行く教授の和服姿が見られよう。

文学部助教授　池田　良治

昭和十六年生まれ。五十年、大阪市立大学大学院修士課程を修了後、五十八年まで姫路工業大学に勤務。気鋭のD・H・ロレンス研究家であると同時に、古今東西の文化を深く理解する、幅広い小説の読み手であり、また演劇にも造詣が深い。孤独な散策を好む哲学者であるかと思えば、興が乗ると、ドイツ・リートやカンツォーネから艶歌まで絶唱される情熱家である。その情熱を教育の面でも大いに発揮され、学生を学問研究の道へと導いて行かれることであろう。

文学部助教授　木庭　元晴

京都府のご出身。鹿児島大学を経て、昭和五十四年東北大学大学院（理学研究科）卒業。理学博士。サンゴ礁を指標とする南西諸島の地形発達史の研究を進め、数々の業績をあげられ、特にESR年代測定法の研究では朝日学術奨励金を受けられた。造礁サンゴ鑑別の第一人者でもある。資性明朗闊達、お酒の方も九州仕込みの由。

文学部専任講師　芝井　敬司

大阪市のご出身。昭和五十三年京都大学文学部史学科（西洋史）卒業。大学院を経て昭和五十六年に京都大学助手に採用される。数量歴史学の歴史学研究法の動向をいち早くわが国に紹介され、史学史学会より注目された。モンテスキューに関する業績もある。先生は高校時代はバスケットボール選手であった由、適度にお酒も嗜まれる。

工学部教授　尾崎　弘

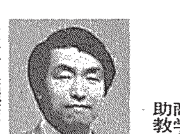
大正九年生まれ、大阪帝国大学工学部通信工学科の第一期生。阪大助手に就任、以後教授に栄進された。ご専門は電気回路解析学、演算電子工学で国内、国外での発表論文は数知れず、この方面ではわが国屈指の権威である。本学では電気回路論、応用数学をご担当されるがCADなど計算機関連の方面に研究意欲を燃やしておられる。

工学部助教授　矢木　秀治

昭和四十五年、京都大学工学部卒業。五十年、同大学院博士課程修了。同年、醗酵槽に関する研究で京大から工博。五十一年から大阪府立大学助手。専門は晶析工学と生物化学工学で、気液両相間の移動現象と結晶や微生物との相関性の面からの研究。趣味は多く、読書、囲碁、麻雀。スポーツは登山、野球、テニス、ゴルフ。

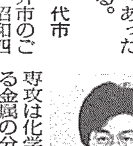
商学部助教授　岩佐　代市

福井市のご出身。昭和四十八年神戸大学経営学部商学科を卒業。昭和五十一年に同大学院経営学研究科博士課程前期課程修了の後、神戸大学助手、専任講師を歴任。金融論・金融機関論を専攻され、主として理論的研究を進めてこられた。本学では銀行論を担当される。家庭にあっては良きパパぶりを発揮される新進気鋭の研究者である。



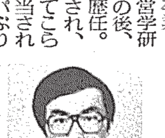
商学部助教授　明神　信夫

富山県高岡市のご出身。昭和四十五年関西大学商学部卒業。同大学院商学研究科博士課程修了後ただちに阪南大学商学部専任講師に就任された。専攻は簿記論で、第二次大戦の合衆国における物価変動会計の制度と理論を研究されている。マネジメント・ゲームを利用した楽しい授業をと意欲を燃やしておられる。趣味は写真撮影など。



工学部助手　佐野　誠

昭和五十七年、本学工学部卒業。五十九年、同大学院博士課程前期課程修了。専攻は化学工学で、溶媒抽出による金属の分離精製技術の開発研究を行っている。



工学部助手　山本　秀樹

昭和五十七年、本学工学部卒業、五十九年、同大学院博士課程前期課程修了。専攻は化学工学で、現在、液体系アンモニア化物の熱力学的性質に関する研究を行っている。

キャンパス情報

トレーニングルームが竣工

昨秋から工事が進められていたトレーニングルームが竣工し、四月一日を期して利用が開始された。

これは体育施設としての機能を失った第一グラウンドを補うものとして、また、誠之館五号館（凱風館）の増設計画の一環として建てられたものである。本来、トレーニングルームとして予定された場所は土地利用上、今少し整備に日時を要するので、誠之館五号館の用地に建設し、それを当分の間使用することで工事が進められてきた。

筋力のあらゆる部分が科学的に鍛えられるトレーニングマシンが配置・整備され、正課体育・課外体育の充実に大いに寄与するものと期待されている。

一般学生の利用も可能であり、体育施設運営協議会の方針もあるので、利用を希望する学生諸君は学生課まで申し出られたい。（学生部）

絵ハガキ「関西大学」第3集、第4集を刊行

絵ハガキ「関西大学」の第三集と第四集が刊行された。

これは、昨年一月に刊行された第一集（学舎編）、第二集（学園の四季編）に続くもので、今回刊行の第三集は歴史編で、「関西法律学校発祥の地」顕彰碑、興正寺、江戸堀学舎、福島学舎、大学予科校舎、千里山学舎大学本館、竣成当時の天六学舎、現在の千里山学舎・天六学舎全景などを収め、別冊として関西大学年譜（和文・英文）が付いている。第四集はモニュメント編で、創立者の群像のレリーフ、児島惟謙先生の胸像、山岡順太郎先生の胸像、岩崎卯一先生の胸像、友の像、和の像、大学院ホールの鷹と鳩、千里山学舎・天六学舎全景を収めたもので、第三集、第四集とも八枚組である。

第一集、第二集ともども、学生生活の思い出の一つとして、また帰省先、友人などへの便りに活用してもらえればよい。

なお、一セット三〇〇円で生協の購買部・書籍部で販売しているので購入願いたい。

協定校・遼寧大学が　本学学生の受講熱望　夏期中国語セミナー開催

既報のとおり、本学は遼寧大学（中国・瀋陽市）と学術交流提携関係にあり、教員の相互派遣がその一環として昨年から実施されている。その遼寧大学が今夏現地で外国人対象の「一九八四年夏期中国語セミナー」を開催するということで、このほど本学にもその「募集要項」が届けられ、参加の呼びかけがあった。

要項によれば、中国語習熟度によってクラスを分け、基礎コース、ヒヤリングコース、会話コース、講読コース別の授業が一週二十時間で五週あり、遼寧大学での講習修了後、鞍山・大連・長城・北京など国内旅行が組まれている。

期間は七月十六日から八月二十八日までの約四十四日間、費用は遼寧大学への納付金九六〇人民元（日本円で約十二万円）のほか食費一日四元程度（約五〇〇円）のもので、往復旅費・海外旅行傷害保険・査証渡航手続費用など諸雑費を含めて約三十四万円が見込まれる。

国際交流課では、この募集要項を要約して別途学内掲示のうえ、応募者を募るが、応募期限は四月二十七日（金）、応募先は国際交流課（大学院ホール一階）で詳細についても国際交流課へ問い合わせればよい。

なお、中国への出入国手続の関係上、応募期限は厳守されたい。（国際交流課）

奨学金制度の説明会　希望者は必ず出席を

入学式に続き、四月十日まで新入生指導行事が実施されるが、その中で奨学金制度についての説明会が開かれるので、奨学金を希望する諸君は出席して説明を聞かれたい。

▼制度全般について説明

この説明会では、奨学金制度全般について概括的な内容と本学での取扱い方法について詳しく説明する。各種奨学生の募集は、殆ど年度当初に集中しているが、ここでは、同時に日本育英会奨学金と関西大学奨学金の出願希望者に対して出願書類を配布し、願書の記入や必要な書類の整え方など、出願の方法について説明する。

▼出願資格と基準

各奨学金制度には、それぞれ目的があり、出願資格と基準が定められている。奨学金の種類によってその表現は異なるが、「勉学の意欲がありながら、経済的理由により修学が困難な者」を出願資格としている場合が多い。資格には、人物・健康・学力・家計（出願者の属する世帯の総所得）などが含まれる。これらについては説明会で詳しく解説されるが、会場で配布される資料や『大学要覧』の一七五～八㌻を熟読し、十分理解されたい。なお、疑問があれば、学生部（厚生課・第二学生課）に直接相談されるとよい。

▼地方自治体・財団奨学金

本学の場合、四～五月にかけて約三〇件の地方自治体や財団の奨学生の募集があるが、これらの案内はその都度学生部の掲示板で周知をはかる。

×××

出願書類の提出日時は、あらかじめ定められているので、必ず期限を守らねばならない。ただし、交通スト等で日程を変更することもあるので、掲示には十分注意すること。

▼日本育英会予約採用者

高等学校在学中に日本育英会特別奨学生採用候補生（予約採用者）に決定している諸君は、学生部（厚生課・第二学生課）へ来課して指示を受けてください。（学生部）

工学会だより

工学会では、新会員に工学会会員証を発給しています。

場所　工学部第四学舎一号館三階工学会事務室

また会員証と一緒に次の本を渡します。授業開始までに一読することを勧めます。

一、工学入門（工学部学生に必要な創造性開発の解説、基礎科目および各専門学科の勉学心得など）

二、会報（新卒業生の就職先、各学科の研究室紹介など）

なお、新入生名簿、就職に関する座談会（二月二十二日実施）の内容は次号の会報に掲載します。

（工学会誌編集委員長・浜中佐和子）

コーラッチ博士が来学　4月19日に全学講演会

□□□□□□□□□□

四月一日から一カ月、ユーゴスラビアのミラディン・コーラッチ博士が来学・滞在される。「招へい研究者規程」適用の第一号。

コーラッチ教授は一九二四年生まれ、ベオグラード大学経済学部の重鎮で経済学講座の主任教授。ユーゴスラビア共産主義者同盟の中央委員。

わが国では、『自主管理の政治経済学』（山崎洋訳、一九八二年、日本評論社）の著者として知られている。

本学での活動の主なスケジュールはつぎの通りである。

四月四日、社会主義経営学会第九回大会（於本学）で記念講演。

四月六日、関西大学経済・政治研究所の公開研究会で報告。

四月十一日、東洋工業防府工場見学。

四月十九日、全学講演会「ソビエト型社会主義と比較してのユーゴスラビア社会主義の特徴」。

四月二十四日、講義「社会主義ユーゴスラビアの企業経営」。

四月二十七日、講義「資本主義的商品生産と社会主義的商品生産」。

講演・報告・講義はすべて英語で行われる。多数の学生の聴講が期待されている。

来学抄信

東北工学院管理考察団の来学

去る一月十日来日した中国・東北工学院訪日管理考察団（王太明副院長ほか三名）は、本学工業技術研究所を訪ね、本学視察と学術交流提携についての協議が行われた。

なお、この協議では両者の学術交流提携について基本的合意に達し、今後の研究交流が期待されている。

シンガポール国立大学のシャー・チィ・メオ氏来学

個人レベルの交流から交流提携の実績を積み上げて行くことの合意ができているシンガポール国立大学から、シャー・チィ・メオ氏（政治学部シニアレクチャラー）が三月二十九日に来学、本学の東南アジア関係研究者との研究交流会が行われた。

同氏は本学の学術交流調査団が昭和五十七年十二月に同大学を訪問した際、同大学側のメンバーとして協議に同席したスタッフの一人で、当時から本学との交流に深い関心を示しておられたが、このたび来日の機会を利用して、個人レベルの交流の第一弾として実現したものである。（国際交流課）

学位取得

工学部助教授　桜井　美政

京都大学工学博士

「オーディトリアムの音場計算法に関する研究」

学位授与年月日は昭和五十八年五月二十三日

工学部助手　隈元　昭

京都大学工学博士

「サイリスタを用いた電動機の運転制御法に関する研究」

学位授与年月日は昭和五十八年九月二十四日

社会学部教授　高木　修

京都大学文学博士

「態度構造および態度と行動の関係の研究」

学位授与年月日は昭和五十九年一月二十三日

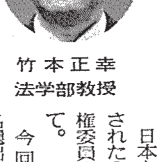
川上　敬逸氏（かわかみ・けいいつ＝名誉教授）三月九日午後三時五十四分、老衰のため生駒市俵口町の娘婿片山英明さん方で死去、七十九歳。

昭和四年九州帝国大学法文学部卒業、十一年本学専門部助教授、二十一年から法学部教授。法学部長、学生部長などを歴任。四十八年名誉教授。専攻は国際法。法学博士。

田中　熙氏（たなか・ひろし＝名誉教授）三月二十六日午前八時五十分、心筋コウソクのため京都市左京区の日本バプテスト病院で死去、八十三歳。

大正十五年京都帝国大学文学部卒業、昭和二十一年から本学文学部教授。四十六年名誉教授。専攻は倫理学。文学博士。

竹本正幸法学部教授　日本人初の委員に　国連人権小委

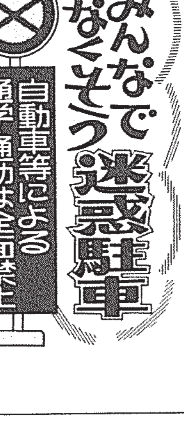


竹本正幸　法学部教授

ジュネーブで開催された国連人権委員会は、去る三月十三日、国連の人権擁護活動の推進機関である「差別防止・少数者保護小委員会」（人権小委）の委員二十六名の選挙を行い、日本政府が指名推薦した竹本正幸法学部教授（国際法）を委員の一人に選出した。

日本から小委員会の委員が選出されたのは、一九四六年に国連人権委員会が発足して以来、初めて。

今回の選挙ではアジアから五名選出されたが、日本は一昨年から人権委員会（四十三カ国で構成）のメンバー国になった人権後進国だけに、関係者の喜びもひとしお。



総合コースについて

関西大学では一般教育の一環として、総合コースという他の科目とは一味違う科目を設けている。

総合コースの特徴は、それぞれのテーマについて複数の先生方による多様な角度からのアプローチが展開されることによって、学生諸君に複眼的かつ柔軟な視野と、問題を総合的に把握する能力とを与えうる点にあるといえよう。

以下、本年度開講の「部落解放論」、「人権問題論」、「現代の中国」、「現代社会と職業」、「ライフサイエンス：〈からだ〉と〈こころ〉」の各テーマ代表者にそれぞれの開講趣旨、講義の内容と形態などについてガイダンスしていただく。できるだけ多くの学生諸君に、これらのユニークな学際的研究の成果に耳を傾けていただきたいと思う。

〈橋本（征）〉

部落解放論

テーマ代表者　田中　欣和

「部落解放論」は一般教育科目として七四年以来毎年開講されてきた。はじめは社会科学系列に属する科目として、その後は総合コースとしてであるが、本学の部落解放教育において重要な一環となっている。

本学が研究・教育を通じて部落解放のために大学としての役割をになっていくという基本姿勢を決めた背景やそれ以来の経過については『部落問題と大学』（本学発行）などを見ていただきたいが、この十年間にも実にいろいろなことがあった上で、今、学生諸君によびかけたいことだけを書く。

というのは、諸君のなかに「部落問題？　知っているよ。差別はいけないよ。オワリ」といった安易なワカリ方？（ワカッテイルつもり）がひろがっていないかということである。この十年のあいだに関西などいくつかの地方では、小・中・高でもたしかに「同和教育」はひろがった。大学入学前に一応初歩的知識をもった人はふえた。しかし、学ぶことと生きることが分離しやすい状況のなかで、「差別はいけない。マル。」という反応が形成されたところで、人間として生きることのなかみがゆたかになった訳ではなかろう。

「差別されている人々は気の毒だな」といった感じ方をもっている諸君は多いようだ。しかし、「同情」なんてむしろゴウマンなんだという思想に触発される機会もないままに「理解」しているつもりの人も少なくはない。

差別の問題はなま身の人間の問題であり、一人一人の生き方の問題である。部落問題など今まで考えたことがないという人も、「一応知っている」つもりの人も、自分の社会認識・人間認識をあらためて問い直し、深めるために「部落解放論」に主体的に参加してほしい。「重要な問題らしいけれども自分は関係ない」と思っている諸君でも、もし一年間を通じて考える機会があれば、「関係ない」どころではないと実感するはずである。

授業は三人の担当者が分担するが、共通して「部落差別の現実から学ぶ」「差別に抗して人間としての誇りを守って生きて来た人々に学ぶ」という視点で、具体的な事実を大切にして語っていくであろう。

部落解放ということが、日本の人口のうちの少数部分にだけかかわることではなくて、諸君一人一人の解放にかかわることだととらえられた時、この授業はその意義をもったことになる。

（文学部教授）

人権問題論

テーマ代表者　竹内　良知

人間は、人間であるというそのことだけで、すでに、何びとも不可侵の権利をもっており、またもたなければならない、というのが人権思想である。古代ギリシャの悲劇『アンティゴネ』（ソポクレス）のなかにはそうした人権思想ないし人権意識が見出される。日本においても、私たちは『平家物語』のなかの「妓王」のくだりなどにそうした意識を見出すことができる。しかし、そのように古い歴史をもつにもかかわらず、人権思想が、政治または法という歴史的現実のなかで最も重要な領域において、時代を形成する要因となったのは、かなり新しいことである。人権思想が大きな歴史的潮流として成立するのは、近代ブルジョア国家が成立する過程においてであった。近代ブルジョア国家は人権の実現を〝たてまえ〟として成立したのである。人権思想は既存の社会が産み出した抑圧や差別をのりこえることが人びとの切実な要求となったところに〝思想〟として成立したのである。

ところで、近代の社会と国家においても、人権は十分には実現されていない。だから、近代史においては、人権の拡大と実現を求める要求がつねに大きな底流をなしてきた。社会と時代の動きがたえず新しい人権問題を生み、その解決の努力のなかで、人権思想も大きく発展してきた。私たちはそれを国連の採択した諸文書に見ることができる。しかし、今日、国家と社会とは、かえって、人間疎外を深め、抑圧と差別を複雑な仕方でさまざまにつよめる方向をとろうとしている。近代文明のめざましい発展は一面で人類そのものの存続の危機をさえもたらしているが、国家はその危機を解決することができず、その危機を管理するために抑圧と差別をつよめる傾向を示している。それだけに、人権の問題は人びとの重大な関心事になっている。現代の人権思想はこの人類的危機とのかかわりのなかでさらに深められなければならないであろう。

私たちは、総合コース「人権問題論」をこのような問題意識に立ってすすめるつもりである。そして、とくに、現代の日本に見られる差別や抑圧の実態を見つめ、分析することに努力を注ぐつもりである。人権問題は何よりも、自分が現代という時代を人間としてどう生きるかという〝主体にかかわる思想〟の問題である。時間の制約や私たちの力不足のために、私たちの意図が十分実現されないことがあるかもしれないが、聴講者諸君が私たちといっしょに考え、現代に生きる思想を自ら形成するきっかけにして下さるならば、幸甚である。

（文学部教授）

現代の中国

テーマ代表者　奥村　郁三

総合コース「現代の中国」は、現代中国とその特徴について多角的に理解を深めようとする試みであって、そのために基本的な八つのテーマを選んで、各学部の中国関係の専門家による講義を組んでいる。

中国社会は一八四〇年のアヘン戦争以来、百年にわたる苦闘の末、一九四九年に未曽有の革命によって新たな政権が生れ、新国家が誕生した。この革命がどれ程の大革命であったかは、われわれの想像をはるかに超える。新国家は荒廃し尽した社会、因習に満ちた世界を引き継ぎ新たな未来を創らねばならなかった。その後、社会主義改造、大躍進政策、文化大革命、林彪事件、四人組失脚、社会主義現代化路線へと激動につぐ激動の中を歩んでいる。もし今日の「現代化」政策が当を得ない方法で実行されれば、経済の混乱はもとより、党への信頼や社会主義の未来への希望まで奪いかねない。今後、中国はやはり全力をあげて「現代化」を進めるであろうが、その方法は中国の現実から出発した独自の方法を基本的にとって行くと思われる。過去のさまざまの現象は、それぞれ中国独自の歴史的・社会的要因があり、中国の現状は良きにつけ悪しきにつけそれらの上に立っているからである。例えば現在の諸政策、憲法は文革の反省に立つものが多いが、それには文革が起ってきた背景・要因を考えねばならない。文革が政治・経済の混乱にとどまらず、思想や社会そのものにも全局的に影響があったとするならば、反省は全局面に及ばねばならず、その上で「現代化」に関する実践の積み上げによって社会主義中国を築いていかなければならない。中国はやはり大変動のただ中にある。

好むと好まざるとにかかわらず、われわれは現代中国の動向が世界平和、世界政治、世界経済、そして世界の社会主義思想といった、全世界の重要な諸問題に直接影響を与えるであろうことを否定できない。とりわけわが国は二千年にわたる交流の深い歴史があり、その中で明治以前は文明の先輩として、明治以後は主として侵略の対象として絶え間のない関係を続けてきた。第二次大戦後の新たな関係は、一九七二年の日中共同声明、七八年の日中平和友好条約を基盤に生みだされつつある。この平和的関係を持続させるには、侵略の過去を忘れないことが核心である。こうした諸状況のもとで、中国という国家をより深く理解することは、すぐれて現実的課題であることはいうまでもない。総合コース「現代の中国」がそのために少しでも役に立つことができれば、担当者一同、望外の幸せである。

（法学部教授）

現代社会と職業

テーマ代表者　岸井　貞男

学生諸君が大学に入学してくる目的はさまざまであるが、その最大の共通目的は、なんといっても卒業後四十年以上の長きにわたって送ることを余儀なくされる「職業」生活を、より有利な条件で選択できるパスポートを入手するためであろう。もっとも、女子学生は男子学生とは必ずしも同じ目的で入学してくるとは限らないが、女子の高学歴化は職業意識を高め、就職後の勤続年数を長期化させる傾向にあり、この現象は高まることはあっても低下するとは考えられないから、女子学生にとっても、職業は人生にとって重要な意味をもちつつある。

「職業」が学生諸君にとってこのような意味をもつとすると、在学中に「職業」について十分な知識を身につけ、「職業」に対する理解を深めておくことは、卒業年度における職業選択に役立つだけではなく、その後の職業生活を有意義に送るためには非常に重要なことである。しかし、現在の大学のカリキュラムの中には、「職業」をとりまく諸問題の一部を研究の対象にした学科目はみられるが、現代社会における職業の多面的な諸問題を総合的にとらえ、これを分析検討した「職業学」ともいうべき学科目はない。この大学におけるカリキュラムの、いわば空白ともいうべきものを埋めるために設けられたのが総合コース「現代社会と職業」である。

この講義が総合コースとして開設されたことからも理解されるごとく、現代社会における「職業」をとりまく諸問題はきわめて複雑多岐にわたり、ひとりの研究者がそのすべてをこなすことは到底不可能である。したがって、その総合的研究は、複数の、しかもかなりの人数の研究者の協力がなければその目的を達成することはできない。幸にも本学が六学部を有する総合大学であるため、七名からなるチームを編成することができ、これによってこれから職業に就こうとする学生諸君に有意義な講義をすることが可能となった。

総合コース「現代社会と職業」は、以上のような実用的意味をこめて開設されたものであるから、学生諸君の将来における職業生活に役立つような内容にすべきであると考え、一年間にわたる共同討議を重ね、つぎのような七つのテーマを選定して講義をすることにした。(1)現代社会における「職業」と「法」（法学部教授　岸井貞男）(2)労働権保障の現代的課題（法学部助教授　大沼邦博）(3)人間にとって労働とは—労働観の変遷—（文学部教授　鯵坂　真）(4)技術の発展と職業（工学部教授　西岡孝男）(5)職業と社会保障（経済学部助教授　一圓光彌）(6)日本サラリーマン史（社会学部教授　竹内　洋）(7)職業選択の理論と職業適応（社会学部元教授　行田忠雄）

（法学部教授）

ライフサイエンス：〈からだ〉と〈こころ〉

テーマ代表者　伴　義孝

一六〇億年前、宇宙の始原。四〇億年前、生命は海から誕生した。海水と人体の素成は同じ、これが証拠だ。微生物が進化の大行進を開始した。二〇億年前、生物は「SEX」を発明した。それ迄、生物変種の新生は突然変異が原因だった。が、性の営みがDNA（遺伝子）の変換を可能にした。全ての生物はその種に特有のものを能動的に現示するという説がある。行進は拍車をかけることになった。そして、三〇〇万年前、人類が出現した。

生物学は、一つの生物種が二〇〇万年程で絶滅することを教えてくれる。人類はこの原則を既に大幅に逸脱している。なぜか。どうなるか。多方面の問いかけが必要である。これは他人事でない。本講義はここに出発点をもつ。人間が生きる〈生（ライフ）〉を中心に、生命、生活、生存、発生、人生などを考える、ことになる。

「遺伝子工学とは」「からだの情報機構と制御機構」「随意運動と生活」「身体の延長としての機械」「言語行動のしくみとその形成」「身体の哲学」がアプローチのための個別テーマである。

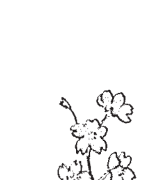
人間は「生きている」条件としての呼吸や排泄などの植物性機能をもつ。また、「生きてゆく」ための行動や感覚などの動物性機能をもつ。両輪が円滑に協働してこそ、充実した生を送ることができる。そのコントロール・タワーは人間特有の〈意志・意欲〉である。ここに〈からだ〉と〈こころ〉の問題が生じる。

頭上にギラギラ、陽光が直射する真夏の昼下がり、少年の裸足に異様な感覚が走った。腐臭が昇った。右足に血がぬめった。ネズミの屍骸が四、五個固まって捨てられていたのだ。少年は夥しいネズミに包囲された幻想に囚われた。以来、活字、会話、画像、何であれ、視覚と聴覚に入るネズミから少年は逃げるようになった。時には、二〇メートル先に屍骸がころがってると予感し、家路を迂回することもある。

〈からだ〉に起ったことが〈こころ〉をこんなにも捕捉し、心理が行動をも囚縛する。逆もまた真なり。欲望という電車が暴走することもある。必要は発明の母と言うが、技術革新が弊害となっている場合もある。

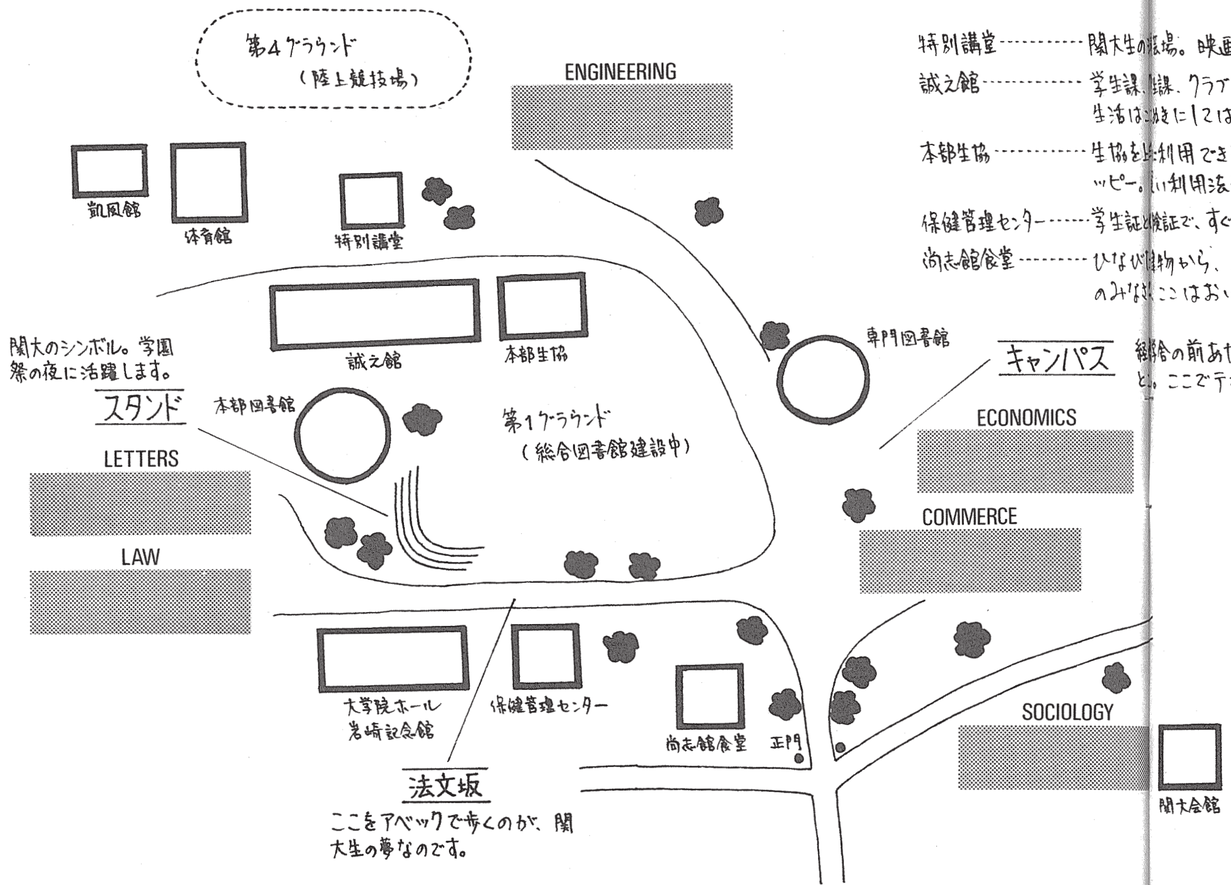
人間の独り善がりに反省の兆しが見える今、人間は人間社会、生物群集、環境、生物圏…との調和に意を必要としている。極微の世界（分子）と無限の世界（宇宙）の間に等価変換可能な発想を求められている。ここに受講学生のアイデアが加乗することになれば、開講の目的は達成される。

（文学部教授）



やってみるか、これ。

ヨウコソボクラノキャンパスヘ



特別講堂……関大生の広場。映画が¥300で見られます。

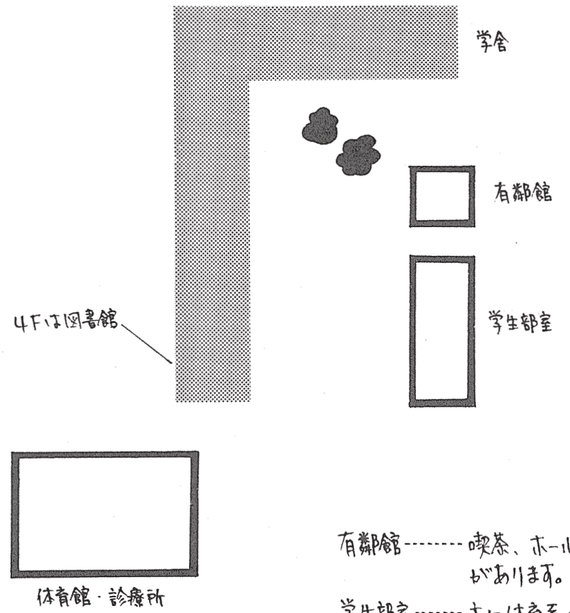
誠之館……学生課、教務課、クラブBOXなどがあり、学生生活はこれなくしては考えられない。

本部生協……生協を上手に利用できる人は、学生生活もハッピー。よい利用法を。

保健管理センター……学生証と保険証で、すぐ診察してもらえます。

尚志館食堂……ひなびた建物から、みそ汁の香り。下宿生のみなさん、ここはおいしい。

キャンパス　経済学部の前あたりが一番キャンパスらしいと。ここでテニスをすれば、関大生。



有鄰館……喫茶、ホール、会議室などがあります。

学生部室……主に体育系のクラブが集まっています。

SENRIYAMA　TENROKU

BY アート デザイン グループ

昭和59年度行事予定表

◇…学務関係…◇

【昭和59年】
4月1日　学年始　前期開始
2日　学部在学生成績発表　各種届出手続（5日まで）
7日　学部入学式　学部新入生指導行事期間（10日まで）
10日　大学院入学式　大学院新入生オリエンテーション（12日まで）
11日　学部授業開始　大学院履修届受付（20日まで）
16日　大学院授業開始
5月1日　大学院修士論文計画書（9月期修了）提出締切
6月5日　本学外格記念日
8日　大学院外国語学力認定試験出願受付（9日まで）
18日　大学院外国語学力認定試験
7月1日　夏期休業（8月31日まで）
8月1日　大学院修士論文（9月期修了）提出締切
9月19日　学部（1T）前期授業終了＝予定
20日　学部（1T）前期末試験（30日まで）＝予定
21日　学部（文科系）前期授業終了＝予定
22日　学部（文科系）前期末試験（30日まで）＝予定
27日　大学院修士記（9月期修了）授与式
28日　大学院前期末試験（29日まで）
30日　学部前期終了　大学院前期終了
10月1日　後期開始　授業開始
16日　大学院修士論文計画書（3月期修了）提出締切
11月4日　本学創立記念日
7日　大学院外国語学力認定試験出願受付（8日まで）
19日　大学院外国語学力認定試験
12月21日　冬期休業（1月7日まで）

【昭和60年】
1月16日　大学院文科系研究科修士論文（3月期修了）提出締切
22日　学部後期授業終了
23日　学部学年末試験（2月26日まで）＝予定
31日　大学院授業終了
2月7日　大学院学年末試験（9日まで）
28日　大学院工学研究科修士論文（3月期修了）提出締切
3月1日　大学院修士論文面接試問・公聞会（5日まで）
11日　大学院博士課程前期課程・修士課程修了者発表
23日　大学院在学生成績発表
25日　学部卒業式
27日　大学院修士記（3月期修了）授与式
31日　学年終・後期終了

◇…就職関係…◇

4月4日　就職ガイダンス
『就職要覧（手引編）』・「求職票」配布　第1部（経済学部）
5日　同　右　第1部（法学部・文学部・商学部・社会学部）
6日　英文タイプ講習会（第1回）申込受付（12日まで）
11日　「求職票」受付　第1部（経済学部・商学部・社会学部）
12日　同　右　第1部（法学部・文学部）
就職ガイダンス
『就職要覧（手引編）』・「求職票」配布　工学部
13日　就職ガイダンス（手引編）・「求職票」配布　第2部（全学部）
【就職要覧（手引編）】・「求職票」配布　学部
英文タイプ講習会（第1回）開始（5月22日まで）
18日　「求職票」受付　第2部（全学部）
中旬　『就職要覧（資料編）』配布
業界研究セミナー（6月下旬まで）
18日　英文タイプ講習会（第2回）申込受付（24日まで）
25日　英文タイプ講習会（第2回）開始（6月29日まで）
6月中旬　就職ガイダンス

◇…厚生課関係…◇

【昭和59年】
4月1日　2～4年次生の下宿紹介開始（60年1月中旬まで）
9日　奨学金制度説明会（経済学部・商学部・工学部新入生）
10日　同　右（法学部・文学部・社会学部新入生）
11日　日本育英会　奨学生募集説明会　2～4年次生
関西大学　大学院生
中旬　各種地方自治体・財団等奨学生募集開始（5月中旬まで）
下旬　日本育英会　奨学生出願者仮面接＝願書提出
関西大学　奨学生出願者本面接＝願書提出
アルバイト登録用紙交付開始（5月末日まで）
5月1日　アルバイト登録受付開始（6月末日まで）
上旬　日本育英会奨学生の奨学金受領資格確認
中旬　日本育英会　奨学生出願者本面接　2～4年次生
関西大学　大学院生
日本育英会奨学生（大学院予約）採用手続
日本育英会　奨学生出願者（1年次生）本面接
関西大学
7月上旬　日本育英奨同友会・日本育英奨励会の合同キャンプ
9月上旬　日本育英会奨学生採用手続（学部・大学院）
中旬　関西大学奨学生採用手続
日本育英会奨学生募集（1年二次）説明会
下旬　日本育英会奨学生（大学院予約採用）募集説明会＝予定
日本育英会奨学生の奨学金受領資格確認
10月上旬　日本育英会奨学生出願者（1年二次・大学院予約採用）
仮面接＝願書提出
中旬　同　右　本面接
11月下旬　日本育英会　奨学金返還説明会
関西大学
12月中旬　日本育英会採用証書提出
日本育英会奨学生の奨学金受領資格確認
21日　「黒奨・山の家」年末年始特別利用取扱期間（60年1月7日まで）

【昭和60年】
1月中旬　在学生の下宿紹介中止入新入生の受入準備のため3月末日まで▽
日本育英会奨学生出願者（1年二次・大学院予約）採用説明会
2月中旬　新入生の下宿紹介開始
学生寮入寮希望者募集要項の公告
入寮出願者の受付開始（新入生のみ）
3月中旬　入寮出願者の第二次選考＝書類選考
下旬　同　右　第二次選考＝面接・健康診断
（注）日本育英会奨学金制度の変更が予定されており、それに伴い日程を変更する場合がある。

◇…保健管理センター関係…◇

4月1日　学部第1部・大学院男子学生健康診断（23日まで）
……千里山体育館
25日　学部第1部・大学院女子学生健康診断（28日まで）
……千里山保健管理センター
5月7日　学部第2部女子学生健康診断……天六第二診療所
学部第2部男子学生健康診断（10日まで）……天六体育館
15日　教職員健康診断（23日まで）……千里山保健管理センター
30日　天六職員健康診断……天六第二診療所

「人権」の思想を身につけよう

『人間をさがす旅』を手がかりに

部落問題研究室室長　鈴木　祥蔵

一、「横浜事件」について

一九八三年の二月初め、横浜の山下公園や横浜スタジアム近辺で、野宿している「浮浪者」が中学生をなぐる蹴るの暴行を加えられたあげく、ついに撲殺されたとの新聞記事が連日日本中にそのショックが走りぬけた。

その後、田中用の惨生中学校の先生が、生徒をナイフで切りつけた事件、戸塚ヨットスクールの内情暴露、手入れなしの事件の報道が相ついで、いつの間にかこの「横浜事件」はかき消されてしまった。

新聞には「横浜浮浪者殺害事件」として報道され、二、三日のうちに日本中にそのショックが走りぬけた。

その後、田中用の惨生中学校の先生が、生徒をナイフで切りつけた事件、戸塚ヨットスクールの内情暴露、手入れなしの事件の報道が相ついで、いつの間にかこの「横浜事件」はかき消されてしまった。

私の脳裏からもこの事件のことが消えかけた頃、ふとしたキッカケで私は一冊の本を手にすることによって、この事件の本質ともいうべき「差別」の問題に突っかされたのである。

青木悦著『人間をさがす旅―浮浪者たち―』（民衆社刊）がそれだ。

この本の著者青木悦さんは『朝日民主新聞』の記者で、中学生の子を持つ母親であり、横浜にすんでいる。だから青木さんは「横浜事件」をとっさのほか自分のこととして考えさせる得なくなり、この事件の本質を探ろうと努力したのである。青木さんはこの本を世の中学生たちに読ませておきたいたそうな。『はしがき』の表題が「中学生の皆さんへ」となっている。

その『はしがき』で、青木さんは、中学生がなぜ「浮浪者」と呼ばれる人たちを殺戮し殺さなければならなかったのだろうか、それを問うてゆこうたに、『殺された側』つまり「浮浪者」といわれ差別されてきた人たちの側の問題を明らかにしなければならなくなったのである。

二、「浮浪者」から「日雇労働者」へ

「殺し」にまわった少年たちは、「殺された側」の人と同じようにこの「問題に発送した」といわれる社会から共にはじき出され差別されているのだ。

マスコミで無責任に使用している「浮浪者」という言葉に青木さんはこだわりはじめる。

青木さんの「日常性」から見えなくされてしまっていた「浮浪者」という人たちの「生活」を見なければおちくこの「事件」の本質は理解できないに違いないと思いはじめる青木さんは、思い切ってそこに協みこんでいって、そうしてこの本質を見つけ出す。

東京の『山谷』、大阪の『釜ガさき』と並んで有名な横浜の『寿町』で青木さんは、「タバコ、酒、ニンニク、汗、足そして最後に、風呂に入ることの少ない男たちの体のにおい、洗濯することの少ない汚服の汚れたにおい」をかぐのだ。

これらのにおいは、最初青木さんを「ひっ」とさせる。しかし、青木さんは、それらのにおいから何時か自分の少女時代のあるべきものの鏡象を思い起こさせられている自分に気づくのである。『寿』の匂いとなれ、それにプラスされて強いにおい」というにおい、つまりの自分の小さい頃、仲間たちから吸い込んだにおいにつてくられた自分のにおいとちがある感性を引き出されてしまう。それから急に親しみを感じてゝ入込んでゆく横浜の「寿町」の「浮浪者」たちを「浮浪者」とは呼べなくなる。そして「日雇労働者」と呼び改めつゆかこるを得なくなる。

青木さんは、「使い捨てられる」人々について詳細なレポートを出ろう決心する。そしておし、まさにクズとして捨部にほうり込まれようの格闘に取りたてられていたのである。

三、新入生諸君へのアピール

関西大学に入学された新一年生諸君に学心からお祝いを申し上げよう。と同時に、この横浜事件に出てくる「中学生」たちのような同年代のなかまたちを、「人間の屑だ」と言えるのだろうか。

在日朝鮮人・韓国人に対する差別、障害者に対する差別、あるいは性差別などさまざまな差別が「われわれが安住しつつある学」にお苦慰されないこと課題としてあるのである。

一九八三（昭）年末、Ⅱ部での冬のゼミ、「日雇労働者」を集団で乗っ

「寿町」の「しきじ学級」の人たちと知りあうことになる。ここにはわれわれの住むこの現代社会の表面には失われしまった「人間」が人間を搾取するということ、本当の人間の相関関係というものがまた結ばれていきづいているということに気づかされる。

そこから子どもたちを見ると、いかに子どもたちが「人間」を探ろうとしているかが見えてくる。子どもたちは、この現代の社会から「はじき出された」ばかりのせいもあって、いらだち、あせり、ふるせなく、落ちつかず、怒り、小さい時から「人間の屑」といわれる恐怖におののき、目の前に出てきた「屑」を見つけるとそれを蹴た

して死に至りしめた中学生たちは、許せない行為をしたのであるが、「日雇労働者」たちも「屑」をもってその行為を私刑しているのである。問題は、この中学生たちも実は「被害者」としての側面を持っていたということなのである。

「殺すも殺すなされる」だが、殺される側も殺されない側だ。という認識が問題なのである。この「被害者」と「加害者」という両者の関係をつくり出している「私」をもふくめた社会の関係が問題なのである。

直接にはわれわれはいま学という小社会の中で現代社会の縮図としての関係をつくりなおしている。だからそこで生きている。だからそこにも絶対「人間が人間を殺

したり差別したり」する関係が偽善でのである。「横浜」だけの現象ではない。

被差別部落の住民に対する差別落書をトイレの壁面に対する差別、新歓合宿の夜の体臭の時間に「大食堂ゲーム」なる遊びに興中し、「エタ、ドッと」笑い興じたり、といった「差別事件」が、次から次へと発生する。

本冊子は、部落問題をはじめとする日本の諸差別事象を質を深く認識し、理解し貢いたいと願って、毎年、編集・発売されている入門書である。

内容は、「部落差別の現実と大学」「部落問題と部落解放運動」「社会・部落問題と教育」「部落問題の歴史」「部落問題の解決に向けて」「国際人権規約の意義」「在日朝鮮人の歴史」

内容は、「大学とは」「大学生活・思い出」「学問のいとなみ」「青春・思い出」の四部から成っている。

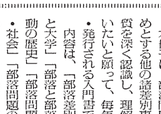
第一部「大学とは」では、大学とはどういうところかについての大学論の論稿が収められており、第二部「大学生活」では、新入生諸君が学生生活の中で直面するさまざまな問題―時間の使い方、消費生活、アルバイト、教師とのつきあい方など―を取り上げ、有益な指針、示唆が語られている。第三部は学問の研究に関する「学問へのいざない」の論稿を収め、第四部では、各学部の教員に、自らの大学時代を振り返っての「青春・思い出」を語ってもらっている。教員二十人のそれぞれの「青春」は、学生諸君に何かを訴え予にはおかないであろう。

本冊子は、部落問題の現状、西大学と部落問題の七章から成り、豊富な「資料」も添えられている。

総合コース「部落解放論」および入門コース「部落解放教育の研究」課程「部落解放教育の研究」等の参考書として、あるいは研究会・サークル活動での討議資料として利用され、広く学生たちに読まれることを切望する。

関西大学部落問題資料（№7）

『部落問題と大学』



部落問題と大学

関西大学

交換派遣・受入れ計画、招へい計画決まる

昭和59年度

「国際交流の促進と発展」の方針のもとに、かねてより外国人研究者の受入れ体制強化の一環として、受入れ規程の制定が検討されていたが、この四月より「外国人研究者規程」が施行されることになり、その第一弾としての昭和五十九年度交換派遣・受入れ計画、招へい計画が決まりおりである。

なお、このほか来日中の外国人研究者を招いて講演会を開催する企画も開かれたので、今後この種の催しは別表のとおりである。

（国際交流課）

昭和59年度　交換派遣・受入れ計画

本学からの派遣教員			協定校	協定校からの受入れ教員		
所属・職・氏名	派遣時期	派遣目的		所属・職・氏名	受入れ時期	受入れ計画
商学部　亀井利明教授	7月下旬から1ヵ月	保険理論の講義 リスク・マネジメント論の講義・講演	遼寧大学（中国・瀋陽市）	江天中文系副教授	4月下旬から3ヵ月	文学部での講義・講演 漢語研究・言語教育に関する研究交流
経済学部　鶴嶋雪嶺教授	9月初旬から1ヵ月	日本経済の講義		孫文良歴史系副教授	4月下旬から3ヵ月	文学部での講義・講演 明清史研究に関する研究交流
工学部　西村山治教授	9月上旬から1ヵ月	溶媒抽出化学に関する講義と研究交流				
文学部　佐伯哲夫教授	8月下旬から2ヵ月	日本語学に関する講義・講演	復旦大学（中国・上海市）	（未　定）		

注）遼寧大学とは58.3.6.　復旦大学とは58.12.7.　にそれぞれ締結した協定に基づく相互派遣

昭和59年度　招へい教授（研究員）の招へい計画

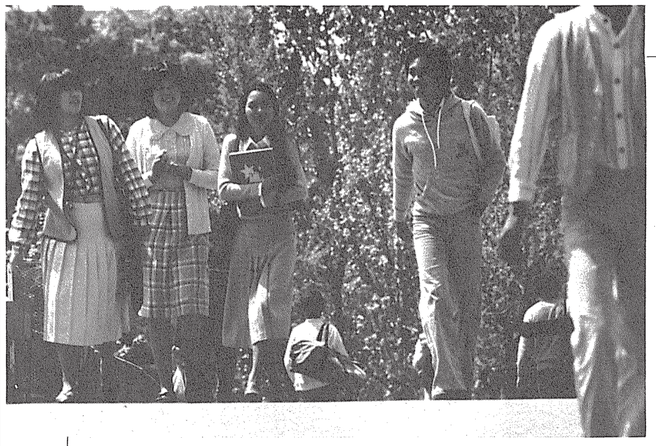
招へい資格	被招へい者職・氏名	国籍	受入れ機関	招へい時期・期間	受入れ期間中の教育・研究活動計画
招へい研究員	*Miladin Gorach*（ミラディン　コーラッチ） ベオグラード大学経済学部教授	ユーゴスラビア社会主義連邦共和国	商学部	4月1日から5月1日まで	○公開講義「経済原論」「ソ連経済論」「経営学総論」 ○経政研・公開研究会での報告 ○社会主義経営学会第9回大会での講演
招へい研究員	*Luc Delaey*（ルック　デラエイ） カソリック・ルーベン大学工学部教授	ベルギー王国	工学部	4月6日から5月7日まで	金属材料とその工業的応用に関する ○セミナー、研究会、学術講演（2回） ○形状記憶合金の共同研究 ○共著書の執筆
招へい研究員	*Barış Mater*（バルシュ　マテル） イスタンブール大学海洋地理学研究所助教授	トルコ共和国	東西学術研究所	4月17日から5月31日まで（予定）	東西文化交流史研究班の「水利用技術伝播の研究」における文献資料の解読、分析
招へい研究員	*Christiaan J.A Jörg*（クリスチャン　ヨルグ） フローニンゲン博物館　館長補佐	ネーデルランド王国（オランダ）	東西学術研究所	5月12日から6月21日まで（予定）	○東西文化交流史研究班の「日中欧間陶磁器貿易の研究」における共同研究（毎火曜日） ○学術講演2回（一部1回、二部1回）
招へい研究員	*Karl Riha*（カール　リーハ） ジーゲン大学　正教授	ドイツ連邦共和国（西ドイツ）	文学部	9月16日から10月15日まで（予定）	○公開講義2回（9/21、9/25） ○学術講演2回（9/19、10/11） ○コロキウム1回（9/28） ○公開シンポジウム1回（10/13） ○共同研究6回
招へい研究員	（東北工学院の教授相当の者）	中華人民共和国	工業技術研究所	（計画として1ヵ月・2名）	○研究交流会 ○共同研究

〝青春〟を読みなおす

いま、〝青春〟を真正面から論ずることは極めて不人気のようである。当世はやり言葉ふうにいえば、それは〝ダサイ〟以外の何物でもないかもしれない。しかし、それが〝青春〟そのものの不在を意味しているのなら、事は重大だ。おれの無知に居直るなかれ。小手先だけの付け焼刃の教養や技術に自足するなかれ。陳腐な世俗的価値に安住するなかれ。あどけなさの残る紅顔の美少年、美少女が、おっかなびっくりで、〝青春〟って何？学問するってどういうこと？　人生の意味は？」と恥じらいつつ問いかけるのは、いつの時代にも、なかなか感動的なことなのだ。けれども、〝青春〟はちっともカッコよくなかない。いつもあじめで心ばたしくてカッコわるいものなのだ。だからこそ、少しはマシにガンバッテみようか、んんこに、そしてしなやかに。

新入生諸君！　何はともあれ、時あたかも春うらら、まっさらの戦後生まれ、若き兄貴分が内なる肉声で語る〝青春解読談義〟にしばしのあいだ、ご静聴あれ。

（山野）



必勝法

――植島啓司

ぼくはひとの誘いを断れない性格である（これは自信がある。そして、ギャンブルが大好きである。このこつを並べると、その人間のだいたいのプロフィールが浮かんでくる。しかも、新しもの好きで流行に弱い。異常に好奇心強い（つい女性週刊誌まで読んでしまう）。

ふつうの人々は毎日毎日飽んていると意欲としんどくなる。第一倦きる。徹夜で麻雀をやった後でふらふらと競馬場に楽でいる自分を見ると、ここは反省もする。将来も不安だ。お金が続かないという事情もある。ところが、ぼくは倦きなかったし、反省はしたけれど反省していると気持ちがよかったからで、おを心不思議なくらいよく続いたのであります。

二十歳前後の頃からギャンブルは負ければ金を失うし、勝っても人生を失う」というようなことを書いたことがある。ぼくはどちらかというと（二番の意味で）人生を見失うタイプに区分けされていた。

だいたい何かに異常に集中するのはあり得ないが、運が強っぱいというのはよく分かる。そして、ぼくは世界にもオーソリテイは存在するが、それはあくまでも必要悪であって、つねに無視できないが、決して信じもいけない。

たとえば、昨年の桜花賞馬（つまりミス・ジャパンにあたる）は必要ではあるが、だが、それだと必ず負ける。世の中はそんなものである。

コンピューター予想というのもあるあてにならない。米国のあるスポーツ新聞（競馬）が書いた予名馬を選び出すとスタメと思われていたからである。もちろんこう思わせたのは競馬ジャーナリズム（所謂オフィシャル）である。

ジャンルは絶対にプラスマイナスの0に収束する。ツキは波のように、正常であるということは、同時に精神の意図を示すことではなかに下降線をえがき、それをとどめようとするには「何か」をしなければならない。それを見極める能力は存在する。

ギャンブルは、昨年の桜花賞馬（つまりミス・ジャパンにあたる）は必要ではあるが、だが、それだと必ず負ける。世の中はそんなものである。

コンピューター予想というのもあるあてにならない。米国のあるスポーツ新聞（競馬）が書いた予名馬を選び出すとスタメと思われていたからである。もちろんこう思わせたのは競馬ジャーナリズム（所謂オフィシャル）である。

ルールレットで七回連続赤が出たとする。さて、きみは何目に賭けるか。ぼくは、ぜったい黒に賭ける。

（文学部助教授）

青春の喪失

――架場　久和

逃げていく。

ギャンブルは絶対にプラスマイナス0に収束する。ツキは波のように、正常であるということは、同時に精神の意図を示すことではなかに下降線をえがき、それをとどめようとするには「何か」をしなければならない。それを見極める能力は存在するが、それはあくまでも必要悪であって、つねに無視できないが、決して信じもいけない。

また、どの世界にもオーソリテイは存在するが、それはあくまでも必要悪であって、つねに無視できないが、決して信じもいけない。

たとえば、昨年の桜花賞馬（つまりミス・ジャパンにあたる）は必要ではあるが、だが、それだと必ず負ける。世の中はそんなものである。

ルールレットで七回連続赤が出たとする。さて、きみは何目に賭けるか。ぼくは、ぜったい黒に賭ける。

（文学部助教授）

二部学生の頃

――李　英和

「青春」というものを作り出したのは近代社会だけである。蒸気機関の発明とほぼ同時だったという。それゆえ、未開社会や封建社会における青春というのは想像できない。

近代社会が青春を必要とするのは、子供期を通じて家族の価値高の人間と大人の社会の価値高の間に深い亀裂が存在するためだと社会学は説明している。このような社会では、子供期が終わった後も、大人になるための一種の準備期間が必要となる。人は二の間に自分の人生や世界と下ータルに直面し、様々な葛藤と否定と試行錯誤を繰り返すこと、が、されていく。この時期は大人社会から隔離され既成され、自由に自己を探究することができることになっている。考えてみれば近代社会というのは、人類史上、未曾有なものだ。社会を支えている基本的な制度を海望しかねないような私の学生の内部に制度化しているのだから。

それぞれの時代と社会は固有の青春の形をもっている。青春のこの具体的な形式を与えて表出されるものを「青春」という。

（文学部助教授）

読んでおきたい『大学』

○○84年版を発行○○

毎年、新入生を対象に配布される小冊子の『大学』一九八四年版が発行された。

新入生の諸君は、入学して大学案内や学部の講義要項などをざっまな資料を手にしていそうであろうが、『大学』はこのいずれにもない内容を用意し、新入生諸君が自らの大学生活をどうしても思がめるまこまな指針―時間の使い方、つまるいい方など―を取り上げ、有益な指針、示唆が語られている。第三部は学問の研究に関する「学問へのいざない」の論稿を収め、第四部では、各学部の教員に、自らの大学時代を振り返っての「青春・思い出」を語ってもらっている。教員二十人のそれぞれの「青春」は、学生諸君に何かを訴え予にはおかないであろう。

本冊子は、部落問題の現状、西大学と部落問題の七章から成り、豊富な「資料」も添えられている。

総合コース「部落解放論」および入門コース「部落解放教育の研究」課程「部落解放教育の研究」等の参考書として、あるいは研究会・サークル活動での討議資料として利用され、広く学生たちに読まれることを切望する。

関西大学部落問題資料（№7）

『部落問題と大学』

部落問題と大学

関西大学

本のむだ話

ドクトル・ジバゴのこと

ことしの一月の初旬、「戦場にかける橋」や「アラビアのロレンス」でおなじみのデビッド・リーン監督のもう一つの傑作映画「ドクトル・ジバゴ」を観た。昭和四十一年の日本初公開以来、三度目である。大阪・桜橋の洋画専門の二番館は、ヘンリー・フォンダの最後の主演作「黄昏」との二本立という好企画も手伝ってか、小雪の舞う平日の昼下がりだというのに、満員の盛況ぶりで、この映画の根強い人気にちょっとびっくりさせられた。

むかし観たときより、はるかにすれっからしになっているはずなのに、存分にたのしめたのは、ボリス・パステルナーク（一八九〇―一九六〇）の同名の原作を最近読了したばかりだったからかもしれない。

昭和五十五年の春に刊行された江川卓の新訳本『ドクトル・ジバゴ I・II』（時事通信社）は、さして評判にならなかったようだが、画期的訳業と称讃されよい。以前同じ出版社から出ていた原子林二郎の翻訳は、誠実な仕事ではあったが、本文理解の面で不密な個所がなきにしもあらずで、日本語の文章としてもしっくりこず、途中で投げ出した記憶がある。そこへ行くと、今度の江川訳は、この作品の解釈・研究史をきちんとおさえているうえに、めりはりのきいた歯切れのいい文章で一気に読ませる。

ロシア革命前後の苦闘時代、波瀾万丈の連続のなか、人は生き、愛し、傷つき、別れ、やがて死んでゆく。しかし、人の世の営みがつむぎ、おりなす生のあかしは、時空をこえて、朽ちることがない。映画の画面の背後でたえまなく流れていた、どこか頼りなくてか細げで、それでいて純朴で明朗なバラライカの調べが、そのことを象徴しているかのようだった。

パステルナークは、ことばの真の意味で、詩人の魂の持ち主であったと思われる。それかあらぬか、『ドクトル・ジバゴ』はソ連ではいまなお国禁の書である。その事実の重さに思いをひそめるならば、「いかに映画化に向いており、同時に、いかに映画化になじまない作品であるか」（訳者あとがき）という難解さが秘められているにせよ、この雄篇を卓抜な日本語で読むことができ、名匠の娯楽大作で観ることができる幸せに感謝しなければなるまい。

訳者注解によれば、「ドクトル・ジバゴ」は、ロシア語で、「生あるものの医師」という意味になるという。生きて在ることの何と切ないことか。金篇至るところ、屋の二階で、子供だましそのものみたいな安物の文房具を買い求めては、下宿のおやじによく笑われたものだ。

そのくせはいまに至るも抜けず、身近に読む本がなくても、安くて便利なわが文房四宝とも言うべき、紙と鉛筆と小刀と消しゴムがあれば、退屈することはないし、本よりもつきあいの古いあれこれのがらくたをいじっていれば、機嫌が悪くなることはない。

われながらくた愛好派にとって、もっとも忘れがたいのは、昭和五十二年に四十八歳の若さで急逝した美術評論家石子順造の遺著『ガラクタ百科　身辺のことばとそのイメージ』（昭53、平凡社）であろう。これは、石子が、その晩年、『戦後マンガ史ノート』（昭50、新装版昭55、紀伊國屋書店）という労作を書き下ろすのとほぼ併行して、『月刊百科』（平凡社）に連載しながら、惜しくも未完に終わった論考を中心として、かれの歿後、公刊された著作である。

大漁旗、招き猫、賞状、貯金箱、チンドン屋、表札、ペーパーナイフ、氷彫刻、カストリ雑誌、模造紙幣、銭湯のペンキ絵、アドバルーン、日光写真、プロマイド、マネキン人形など、これまでともすれば取るに足らぬまがい物として無視され、げて物呼ばわりされてきた、くさぐさの小物五十余点への愛惜がたっぷりとこめられた、その名に恥じぬ奇書である。これらのへんてこな物たちが、われわれの生活のなかでもっていた、そして現にもっている一種独特の肌あいや、ほのぼのとなつかしいぬくもりをそう簡単に忘れ去ってしまってよいものだろうか。

いくぶん熱気がさめてきたかに見えるものの、世は依然として一億総〝有名〟（あるいは〝無名〟という名の有名）ブランド志向時代。品質が最高で、意匠が洗練されていて、そのうえ実用性が抜群とあれば、値段に多少の不満はあっても、誰だって欲しくなるのがあたりまえだし、手許に置きたくなるのが人情の自然というものだろう。いい物はいいに決まっているのだから、ケチをつける気はさらさらないが、何によらず、世界の一流品（学問や思想や書物でさえ?）も、使いふるせば、やがてみな、がらくた同然になってしまうかもしれないのだ。

そのとき、あなたは、そのがらくた同然の物に、なおも、夢と希望を託し、変わらぬ愛情を注ぐことができるか。

（法学部助教授）　山野　博史

創立一〇〇周年の意義と記念事業計画

関西大学創立一〇〇周年記念に関する記事は、昨年来数回にわたり本紙に掲載され、教職員・学生・校友その他関係者の一〇〇周年に対する気運が徐々に盛り上がってきている。本号は、多数の新入生を迎えての年度初めの号でもあり、あらためて創立一〇〇周年の意義や記念事業・行事などについて、これまでの記事との重複もあるが、若干紹介することとしたい。

× × ×

関西大学は、明治十九年十一月関西法律学校として創立され、二年後の昭和六十一年に一〇〇周年を迎える。「この間たどってきた歩みは決して平坦な道のりではなく、近代日本の激動の歴史が投影された試練の連続であった。そうした中でのもろもろの事象を反省し、その上に立って一〇一年以後の関西大学の進路をいずこに求めるべきなのか、将来の発展に向けてどのように取り組むべきなのか。この課題が一〇〇年を迎えようとしているいま、切実にわれわれに問われている」という趣旨のことを、久井理事長は本紙第一三三号で述べている。このことこそ、創立一〇〇周年をの大学時代の下宿も昔風の文房具迎えることの意義にほかならない。

こうした意義づけを根底として昨年十月、学内外の衆知を集めて次のような記念事業・行事計画の骨子がまとめられた。

(1)記念会館（仮称）の建設（十七億円）―教育・文化的事業、国際交流、学会開催など多目的に使用できる施設の建設。

(2)セミナー・ハウスの建設（四億五千万円）―教室外での教育研究の場としての施設の建設。

(3)研究・教育振興基金の設定（八億円）―国際交流、学術研究助成および教育助成にあてるための基金を設け、その果実により各事業を実施。

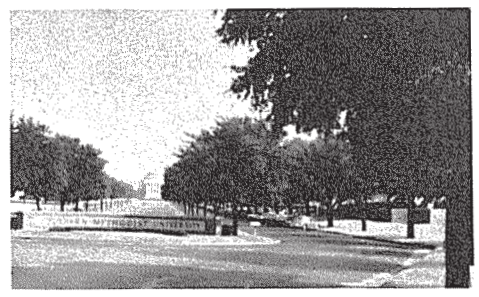
(4)記念刊行物の出版と「内藤文庫」の設置等（二億円）―関西大学一〇〇年史その他の出版および内藤湖南・伯健旧蔵の典籍による「内藤文庫」の設置など。

(5)記念行事・記念式典の挙行（五千万円）。

これら記念事業所要資金は総額三十二億円にのぼり、そのうち(1)、(2)、(3)の各事業（二十九億五千万円）は、寄付金によって実施しようとするものである。すでに昨年十二月以降、学内外関係者各位に対し「募金趣意書」をもって募金依頼の活動をはじめており、新入生のご父母に対してもそのお願いを申し上げている。三月三十一日現在で総額約四億二千五百万円のご芳志が寄せられている。

本年入学された学生諸君は、あたかも創立一〇〇周年という二度とめぐってこない大きな節目の時点に在籍されることになる。願わくば、その意味するところを十分理解され、一段と意義深い学生生活を送られるとともに、本学の将来への発展のため、共に思索し、一〇〇周年を盛り上げていただくことを切望したい。（創立一〇〇周年記念事業事務局）

世界の大学



サザンメソジスト大学（S・M・U）

テキサス州ダラスのハイランドパークにあるS・M・Uの経済学部は、スタッフも学生もそう多くはないが、気品と進取の気風にあふれていた。総長も学部長も、学会で優れた業績をあげている研究者を探してきて、それにふさわしい年俸を出すことが一番大事な仕事であると考えているので、自然にそうなるのであろう。私がいた昨年にも、Journal of Economic Theory のエディターの一人である Pattanaik を、高給でスカウトしてきていた。大学をよくする最もいい方法は、結局優れた業績をあげるスタッフを揃えることだと思う。すでに我が国でもそうなりつつある。

（経済学部教授・小田正雄）

図書館だより

オンライン情報検索サービス

昭和六十年四月開館予定の総合図書館では、利用者サービスの一環として、外部機関保有のデータベースを使用するオンライン情報検索を開始する。この対象は主に研究者で、研究活動の上で必要とする情報検索のサービスをするものである。昭和五十九年度では、試行段階として、DIALOG、JOISおよび日経NEEDS―IR等のデータベースが利用できるようにする。これらは、内容的には二次資料であり、機能的には遡及的検索のための手段でもある。

DIALOGにはDIS社が管理し、人文・社会・自然・応用科学から職業別電話帳にいたるまで、広汎な分野にまたがる約八千万件の情報が収録されている。JOISは日本科学技術情報センターが作製、日本語でつくられたJICSTファイルをはじめとして、化学・工学を中心に、推定一、二〇〇万件の国内外の文献情報をもつ。日経NEEDS―IRは日本経済新聞社、日本エネルギー経済研究所、経済文献研究会によって作製され、約九〇万件の経済関係の文献情報をもっている。各データベースとも公衆電話回線で呼び出すことができ、ディスプレー装置（VDT）から特定のテーマを入力すれば手元の出力装置（CRTおよびプリンタ）に検索結果が出力され、必要な情報が入手できる。

これらのシステムを利用する場合、次の四点に注意する必要がある。①各データベースとも情報の収録期間が限定され、普通、四年間から二十年間である。②出力される情報は一部を除き、書誌事項と抄録にすぎない。従って、原著論文を必要とする場合は、一般の図書館を利用しなければならない。③主題検索を行う場合、ノイズや検索もれが生ずることがある。④外部機関にデータベースの使用料金等を支払う必要がある。

以上のようにオンライン情報検索は、若干の問題点を抱えるものの、その長所はこれらの問題点を補って余りあるものがある。第一に文献検索に要する時間と労力を大幅に削減できる。第二に検索結果は網羅的であり、従来困難であった主題検索でも難なくこなしてしまう。例えば、著者名や所属機関名からアプローチする場合には、完全無欠の検索が可能である。また、先ごろ新聞で、使用ずみの乾電池の廃棄処理に伴う環境汚染の事実が報道されていたが、これに関する文献があるかどうか主題検索により調べてみれば、一〇分とかからない。従来の検索方法では、果たして何分で何件の該当する文献を捜し出せたであろうか。

オンライン情報検索は絶大な威力を発揮しよう。しかし、その利用方法を誤まれば、無残である。高い使用料金だけが請求されて、有益な情報は何一つ得られなかったという事態も起こりうる。図書館では当システムを最大限、効果的に利用していただくため、教職員ならびに学生諸君を対象に左記の要領で説明会を予定している。その際、オンライン情報検索システムの概要と、その効果的利用方法を中心に説明することを予定している。

オンライン情報検索に係る説明会

1	実施日時	昭和59年6月1日（金）から7月20日（金）までの、土曜日を除く開館日の14時30分から16時まで（1日1回）
2	実施場所	専門図書館内の端末設置場所及び第1ゼミ室
3	説明内容	DIALOG、JOIS及び日経NEEDS―IRについて各データベースの概要とその利用方法
4	対象	教職員および学生
5	申込方法	専門図書館で予約を承ります（内線4374）ご相談の上、ご希望のデータベース毎に実施日を指定いたします
6	人数	便宜上、1回につき3名程度とします

新刊紹介

『商業英語の語法』
商学部教授　中間敬弐著
（大修館書店・一九〇〇円）

本書は "Business English" に約五年にわたって執筆された「商業英語語法考察」を全面的に修正・加筆され、新たに二章を加えて纏められたものである。わかりやすく言えば、商業通信文の英語の語法について論述されたもので、主として英米の英語商業通信文やビジネス・コミュニケーションの専門書の商業通信文にみられる英語の語法に焦点をあわせて考察されている。本書のねらいは、日本語訳を通してではなく、英語そのものを観察し、注意を払い、英語のもつ本質をつかんで身につけ、読み書き話すことができるようにすることにある。

具体的には商業通信文を書くにあたって誤りやすい文章や、用語のもつ意味などを豊富な用例をあげて解説されており、英語の正確な使用が示されている。また、日本語の発想にひきずられて誤った文を書かないよう、その来たる原因を明らかにしている。さらに、イギリス英語とアメリカ英語では表現が異なる理由を考察し、その解答を用例をあげて求めているほか、商業通信文を書く際に悩む諸点を明解にされており、また英語商業通信文における分詞構文についての問題提起がなされているなど、極めて多くの示唆に富んでいる。是非一読をお薦めしたい本である。

（来住哲二）

『ニューメディア研究 ―情報新時代を考える』
社会学部教授　井上宏
同　専任講師　多喜弘次　著
（世界思想社・一五〇〇円）

「ニューメディア」なる和製英語（?）がいま日本中を席巻している。〈おニューV〉に対する憧憬と反発の両義性も、INS構想の登場に至って、いまやこの領域では〝パラ色〟を意味するだけになってしまった感さえある。トフラーの未来論やオーウェルの『一九八四年』とも交錯して、議論は留まるところを知らない。本書の刊行はまさに時宜を得たものといってよい。

本書は「ニューメディア社会」の軽妙な概説から始まり、次いでCATVの社会化、生活化の可能性を三つの地域の事例調査によって明らかにする。最後に独自の資料を加えつつ、目配りのきいた冷静な「ニューメディア論」が展開される。一貫して著者たちは「両義性」にこだわる。掲げる調査データはいずれもハード主導のバラ色論に難色を示す。ニューメディアはそう簡単には「生活者のメディア」になれないことを教える。

いずれにせよ、「地域コミュニケーション」の問題は、現代社会の動向に直結する重要なテーマである。今後どのような「地域社会」が実現可能なのか。さらに、軽薄短小を志向する今日の『消費社会』の延長として『ニューメディア社会』が来るとすれば、そこでの「使い手」主体とはいかなる者であるのか。著者らとともに考えたいものである。

（岩見和彦）

▶編集後記◀

陽春の候、新入生歓迎号たらんとするも、意余って、力足らず。しかも、年度初めのあれこれの記事があふれかえっているのをこらんになって、読者諸賢がいささか食傷気味ではないか、とそればかりをおそれている。何卒諒とされたい。

大げさにいえば、人類の歴史始まって以来、〝青春〟の意味は何ひとつ明らかにされていないのではないか。いったい、いつどこの誰が〝青春〟について語り尽したというのか。だとすれば、これはやはり生きてみるしかないようだ。

古来、人の言うとおり、「三とせの春は過ぎ易し」。新入生諸君！　くれぐれも健康に留意して、後悔のないよう、毎日を大切に過ごしていただきたい。

＜橋本（征）・山野＞